J-SIP-B150
M7-03

プロビンシャルコーディネーターの真実

≪47 番目からの跳躍≫

○小笠原　伸平（高知県産業振興センター
ものづくり地産・地消外商センター地産地消部　地産地消課）

はじめに

非常に厳しい現実ではあるが、高知県の生産出荷額のランキングは、全国都道府県の中で４７番目であり、驚くことに１位の愛知県の生産出荷額の実に 1%強でしかない。加えて都道府県格付研究所のランキングでは、最低ランクのＥランクに格付けされている。この厳しい現実の中で、（公財）高知県産業振興センターは文字通り、産業振興の最前線に踏みとどまり続けている。

【出典】製造品出荷額等：2010 年

順位	都道府県	製造品出荷額等
1	愛知県	38,210,826 百万円
2	神奈川県	17,246,683 百万円
46	沖縄県	565,460 百万円
47	高知県	468,063 百万円

近年、産業振興センター内に地産地消・外商センターを設立し、県内で開発した製品を、県外・国外へ外商していく仕組みを構築した。この取り組みの中で、プロビンシャル的な発想をもとに、シーズとニーズの発掘と開発現場のマッチングや販売にいたるプロデュースを含めた、総合コーディネートを展開している。

都市圏外経営論

コーディネートを行う際には当然のこととして、案件の事業性の有無やマッチングする企業が事業に耐えうる体力を備えているか等の考察を行うが、コーディネート全体のことを考えると、経営のことは避けて通れない。巷で開催されるセミナーや勉強会など、指導的な立場の方の語るのはいつも都市圏や大企業における経営論や成功事例が一般的であり、より地方に即した内容をうたっていても、大抵は中央目線のものが大部分である。東京の方法論を高知に持ってきても即応できるはずもなく、地方には地方の経営があることは、考えるべくもない。まず地方発の営業と経営をコーディネートの初期段階で加味することを怠ると、独りよがりの総論と形骸化した空論に成り果ててしまう可能性が大きいと思われる。

都市圏外でのコーディネート

県内でのコーディネートを開始する際に、最も重要と思われるのが県内企業に対する理解度であり、表に出てきにくい（隠れている）ポテンシャルをも正しく把握することが最も望ましい。この理解がされていないと（理解していると勘違いをしていると）現在、当該企業が行っている業務以外のコーディネートを行う事は不可能と思われる。また、コーディネー

トを行う際に必ず直面しなければならないのが、**常に一緒に困る**ことである。あたりまえの事であるが、コーディネートを行うときに少しでも、リスクに鈍感に（自分の事としてとらえない）なっていると事業は絶対にうまくゆかない。相手に本気度が伝わらないからであり、常に立ち位置を一歩前に置く事が大切と考える。

プロビンシャルコーディネートの事例

高知工科大学と県内企業との事業コーディネート

試作機

① スラリーアイス生成装置と微酸性次亜塩素酸水生成装置をマッチングすることによる高殺菌・高鮮度保持を可能にする装置の開発プロジェクト

・プロジェクト開始のきっかけは、高知工科大の別のプロジェクトの懇親会にコア電子の専務が参加され、泉井鐵工所のスラリーと新規装置の共同開発ができないかとの意向を話されているのを弊職が耳にし、３者の意向を確認したうえで、産学官連携事業の補助金を提案し採択。現在研究が進行中。

酒席での闊達な議論が数多く見受けられる高知県であるが、酒の席で交わされた案件が現実のものになった稀有な例と思われる。

試作機

② 大容量で遠距離到達可能な微粒噴霧器の開発プロジェクト

・農業用に開発を進めていた土佐農機の噴霧装置（Ｍ・Ｆ）を、あらゆる環境を想定した噴霧装置としてエビデンスを作成。さらに（Ｍ・Ｆ）の弱点克服を想定した噴霧器の開発に着手。

（株）土佐農機は農業と畜産に商圏を想定していたが、高知県が全国屈指の老人県であることを考慮した結果、（株）コアテックとマッチングすることで、介護施設や公共施設等での使用が視野に入ってきた。

おわりに

企業が何かを新しく始めようとするときには、必ず課題が立ちふさがる。
解決策は見識であり、技術であることが多いが自社での解決は困難な場合が多くみられる。また、解決すべき課題が自社に存在することに気が付いていない企業の経営者も数多く存在するところから、コーディネーターの役割は課題の存在を企業と一緒に考えるところからスタートするべきと考える。そのためには経営者と、よりドメスティックな関係を構築することが求められる。プロビンシャル企業を牽引していくには、その企業の環境に応じた提案が必要であり、その中から生まれるイノベーションは都市圏では発想できない事柄が時として含まれている。上記に例として挙げさせていただいた２例も、その企業の経営者は想定していなかった事柄が現実になりつつある例である。

最後に、コーディネーターとしての本質が如実に現わされたと感じる言葉を記す。

稚夢鬼迫人戈佛心（堺屋太一氏の言）

「子供のような 夢を持ち、鬼の気迫で物事を進め、人の才能で器用にまとめ、最後は仏の心で不満も のみ込む」との意